
縁切 ~エンキリ~

雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

縁切 〜エンキリ〜

【Nコード】

N4691D

【作者名】

雨月

【あらすじ】

エンキリはその昔、ナウマン像を狩っていた時代から存在していた……そんなエンキリ一族の末裔である一人の少年が成長していく？物語。

ブローグ／第一話 自由を求めるエンキリ（前書き）

たんぽぽさん、感想ありがとうございます。連載開始となりましたこの小説、皆さんも出来ましたら応援してください。はじめはちょっとあれですが末永く読んで欲しいと思います。

プロローグ／第一話 自由を求めるエンキリ

プロローグ

駅前に長旅の疲れを発散するように一人の少年があくびをした。高校生ぐらいだろうか？最近の若者にしては珍しく黒髪で短髪だ。目は切れ長でどことなく鋭い印象を受けるが、和やかな雰囲気を持っているという感じでミスマッチだった。

「んんんひっさしぶりだな」

背中に背負っているのは彼の最低限の身の回りの道具だ。既に必要な道具は彼の自宅に送られているだろう……

目の前に広がるのは田舎と都会のちょうど真ん中ほどの賑わいを見せる街だった。少年が背負っている唐草模様の竹刀袋を見ると剣道部に所属していると思われるに違いない。

「さて、いくとするかな……………」

少年は歩き出した。

一、

「ただいまあ！」

えんきりきりや

俺の名前は縁切霧耶。

由緒正しいか知らないが、人と人との縁を切って生活してきた一族の末裔である……………と、なんともかつこいいと思われる仕事かもしれないが、これが意外と収入に困る。

それこそ、歴史はかなり前からあって嘘か本当かはわからんが縄文時代より前の頃から仕事をやっていたそうだ。

時がたつても偉い人とのつながりしかなくて、そのせいで今では顧客を求めているといった現状でこの“エンキリ”という能力を使うものはあまりいなくて普通に働いていたりする。

それで、仕事内容はただ単に縁を断ち切る……………言葉にしたら簡単……………そういった感じだが、これが意外とやっていることはすごい。

一度断ち切ってしまえばその縁が戻るには再び新たなきっかけを生むしかない。

何のことはよくわからないと思うので説明するにはまず……この“エンキリ”について説明したいと思う。

俺たちには人と人との縁が見え、それが太さによってどのくらい親密なのかわかる。

腐れ縁だつて見えるし、運命の赤い糸だつて見える。

それを棒状のもの（棒ならなんでもいい）

）できってしまうのが俺たち縁切り一族のお仕事である。

縁を断ち切ることによって不幸要素も切ることが可能で……不幸との縁を切ればある程度は幸せになることが出来る。

たとえば、一人女性がストーカー行為にあっているとしよう。

相手が誰なのかわかっていれば……まあ、ここまでわかっているのなら警察にいくだろうが……その人物との縁の糸を見つけて断ち切りやすい。

断ち切った結果、相手は切れてしまった縁の糸のおかげでふとした拍子にその相手と疎遠となってしまう。

その反動が知らないが、縁の糸を断ち切ると、断ち切ってしまった相手と自分に何らかの事象が起こる。

縁を切った相手がストーカーだったらそのストーカーが警察に捕まるか、結婚することになったりするのだ。

つまり、警察と縁ができたりするわけである。

まあ、きってしまった縁の糸を戻すには努力というか、執念というか……そういったものの類があれば戻そうと思えば戻すことが出来る……かもしれない……さて、俺たち一族の能力についてはこんなものだろうか？それなら、幸せになることが可能じゃなか！しかし、その昔に調子に乗って不安要素をぶつつんぶつつん切っちゃうような一人の“エンキリ”がいたそうだ。

エンキリは自分の縁の糸を切るのが非常に難しく、一人の男を幸福にするためにその力を使ったそうだが……その男は幸福を求めず

ぎたために不幸をも招きいれてしまったのだ。

理解できないと思われるので一つのわかりやすい例を挙げよう。

まず、一人の男が宝くじに当たった。

物凄い額を手に入れ、男は大富豪となつて豪邸を建てたのだった。

勿論、財産を守るためにセキュリティを万全にしていた。

だが、ある日……強盗に入られて殺されてしまったのだ。

彼が宝くじに当たらなければそんなことにはならなかったかもしれないのだ。そんなことで、どうやらこの“エンキリ”という能力は使いどころの難しい力のようで他にも一つの糸を断ち切ろうとして他の糸も切っちゃったといううっかりミスも報告されている。よつて、扱いがうまいものしか使うことが許されていない。

まあ、繰り返すことにはなるがとりあえず他人の縁を切るのが俺たち一族のお仕事ということだ。これで理解してもらえただろうか？

「今日からここが俺の家かあ……………」

俺の声は弾んでいる。目の前に広がる少し古ぼけた日本家屋。ここはその昔に名のある“エンキリ”が使用していたという……………反省小屋である。

「……………はあ」

俺の声は沈んだ。

状況を説明しよう。

俺の一族はもう、ナウマン像を追いかけていた頃からの家系であり……………許婚制度を未だにとっている。

縁断ち切るときは齒のない刀の柄を使ったりしているのだから充分古い。

まあ、それはいい……………許婚というのは知っている人も多いだろうが……………小さい頃から結婚する相手が決まっていることをいうそうだ。俺にもその許婚がいた。

ああ、そりゃうらやましいなあと思う人もいるだろう。だが、甘い。

可愛い相手ならまだしも、俺の相手はぎよっとするような人物だった。

大富豪の娘らしく、わがままの限りを尽くす許婚に俺はぎよっとした後、頭にきた。

だから俺は当然、婚約破棄を訴えたのだが通らなかった。俺は許婚の相手の背後を取って……俺と許婚の縁をめたため、切つてやった。それはもう、俺の“エンキリ”史上最大最高にして後に残らないように断ち切ってあげましたとも。そして、俺の許婚は新たな縁が生まれてそっちにいったそう。でも、完璧に疎遠となった俺だったのだが……血を重んずる俺の一族の人たちはこの行為を

「一族に反逆するものの行為」とみなしたらしい。

そして、今の状態となっている。

ちなみに、俺がこっそりと逃げ出さないように俺を監視する“エンキリ”、その数四人。トップ10の中から10、9、8、7で来ている。本当はトップ10が全員俺を監視するはずだったそうなのだが……出来なかったそう。先にばらしておくが俺の爺ちゃんがトップで次にばあちゃん、次が俺の父さん、母さん、姉さんで5まで……実力は高いのだが、どこは偏屈なところもあるので

「たまには一人で考えろ。お前に時間を割きたくない！このままお前との縁を断ち切りたい！」と全員が全員おっしゃっていた。ああ、そういうばあちゃんはそのんことをいっていなかった。ばあちゃん

は「残念ながら、あたしや、目が悪いから縁の糸を断ち切る前にお前の首を断ち切りそうじゃ、イヒヒヒ」といっていた。ぞっとした。

「ま、俺が五番目だから逃げようと思えば逃げれるんだけどね」「ちなみに俺を見張っている人たちは俺をどこかに見逃してしまった場合……“エンキリ”の一族と縁を切られてしまうそう。

まあ、それを行えるのは今の一族の宗主である俺の父さんだけなのだが……

俺が飛ばされたのは俺たち一族とはあまり関係を持たない場所だ。ここで俺が反省するまで……つまり、許婚を自分で失ったのだから自分で結婚する相手を見つけないといけないのだ……実家に帰ることは許されない。個人的な意見としてはまだ結婚するには早い。それに、結婚してしまつてはもう“エンキリ”は自由になれないのである。これもまた、古めかしい制度で……家庭を持った“エンキリ”は常に妻と一緒にではないといけないのだ。どこに行くにでも一緒、四六時中一緒なんて考えられねえ……

そういつた事情で、俺はまだまだ一人でいたいのだ。女の子？そんなの興味のかけらもないね！

「お、可愛い女の子発見！どう？その君い、俺とお茶しない？」

「……………きゃあ！変態よ！！」

ちっ、逃げられたか……………

こほん、まあ、さつきも言つたとおり…………俺はまだ結婚しない予定である。これもまた、俺自身に女性との縁が薄いということもあるのだが…………

「ねえねえ、その君！俺のバットを使つてみないかい？」

「何よ！この変態！」

ばしーん！！

これはまあ、あれだ。許婚との縁を断ち切つたときにやりすぎたらしい。俺自体がもてないわけではないのだ。

「許婚との縁を切る」はずが…………

「女性全般との縁」を断ち切つちやつたようだ。そんな細かい力加減なんて俺、ちょっと苦手なのだ。切るなら最後まで切る！切らないなら初めから切らない！というのが俺のモットーであるからやるなら最後までなの……………悲しいことに約束を護る最後の手段なのである。もつとも、そんなお馬鹿なことをいうのも好き勝手なのだ……………とりあえず、女友達の一人でも作っておかないといずれまたおかしな

「許婚」が現れる可能性がある。あの時は

「これ、俺の部屋の鍵だから………」と言つて（ちなみに、俺の部屋には鍵がつけられていない）俺の部屋に入つた許婚の背後を取つたのだ。だが、次は両親が本気を出してしまうかもしれん……というわけで、俺による俺のための俺の自由な生活を守るために俺は女の子と仲良くならなくてはいけないのだ！なりふり構つていられねえ！今日から俺の戦いの始まりなのだ！

ブローグ／第一話 自由を求めるエンキリ（後書き）

さて、どうだったでしょうか？うまく話が続くような感じになっていたら幸いです。今後はどういった感じにするか一応決めていますが……まあ、ゆっくりやっていこうと思ってます。短編とはちょっと違っていると思うてください。

第二話 始まったエンキリの生活（前書き）

せかさん、こんなに早く感想、ありがとうございます。嬉しかったです！今回はエンキリのお仕事のお話です！

第二話 始まったエンキリの生活

二、

さて、一つここでおさらいをしてみよう。

俺の名前は縁切霧耶だ。

エンキリ一族の末裔にして自分の許婚との縁を切り、さらには女の子との縁まで切ったという物凄い堅物主義者だ……………まあ、女の子との縁が切れたことを俺自身が知るためには少々実力不足（補足

だがエンキリは自分と他者との縁を見るには相当の実力がないといけない）で無理だったのでじいちゃんに聞いたところ見事に「縁なしじゃ」といわれてしまった。つまりところ、これではいけない！早く孫の顔が見たい！と両親が思ったおかげで俺はとりあえず女の子と親しくならないといけなくなっただけである。

「そこのお姉さん、俺と一緒に俺の子を探す素敵な冒険してみない？」
「冒険？」
「そ……………」
ぶすり！！

相手はチヨキで……………お、俺の鼻の穴に指をつっこみやがった！？
なんつゝ女性だ！？

「…ふがあ！」

「冒険ならちようど終わったわ。あんたの汚い鼻の穴に手をつっこんでやったからね……………お宝はあんたの汚い鼻水よ！」

ばしん！！

さらにほつぺを叩くと綺麗なお姉さんは去っていった。ううむ、どこがいけなかったのだろうか？こりゃ、女の子の友達を捜すのは無理ではなかるうか……

「なりふり構っていらねえな……」

昨日ここにやってきてまだ高校にはいっていない。学力云々……というより、この一週間の間はエンキリとしての顧客を探さないといけないのである。さらに、今日の朝に届けられた手紙（両親から）を読んできよつとした。俺に残された期間は後一週間！手紙に書かれていたことは

「後一週間後にあなたの第二の許婚を宗家に呼ぶので誰もいなかったら帰ってきなさい」ということである。誰よりも自由を愛する俺だ。そんな俺がこのまま自由になるには……女友達を作り、両親に知らせることである。そうすれば許婚の件は取り消しになるだろう。

道行く姉ちゃんたちに声を掛けてきたのだが……誰も引つかからない。そりゃそうだろうなあ、平日の昼下がり、こんな暇そうな人間に付き合おうとするなんて人のいい人間がほいほいと歩いていくわけない。いたとしてもわがまま娘だけだ。

「けどなあ……それじゃ……次で百戦連敗だし……よし、最終手段だ！」

俺の目の前にいるのは一人の男性だ。やっきになったわけではない。

「エンキリのあなたが縁結びですか？」

「ええ、そうです」

そう、俺の目の前にいるのは縁結びの神様を奉っている神社だ。わらにもすがる思いでここにやってきた。元来、縁結びの神様とエンキリは敵対するような感じなのだが……さっきも言ったとおり後がないのだ。敵に頭を下げるのも構わないということなのだよ。「もつとも、ここの神主さんが結婚の告白百五十連敗だからなあ……」

……ご利益ないかも」

「失礼な！今度は大丈夫です！」

そういつて神主さんは俺に必勝祈願してくれた。まあ、この神主さんとは結構長い付き合いだ………ちなみに以前俺がいた高校の先輩だった。

「さ、霧耶君………これで大丈夫ですよ。どんな相手でもあなたにめろめろのはずです」

「本当かなあ？そんなことが出来るのなら先輩、すぐに結婚できてますよね？」

先輩の縁は見事に女性と縁がない………というわけでもなく、逆に縁が多すぎる。先輩は優柔不断な男だから浮気をしていたりしてそれが原因でふられているのだろう。逆に運がありすぎるのも問題だからな………

「大丈夫！僕を信じなさい」

「まあ、実力は信じますよ。ありがとうございます。無料でしてくれたお礼として誰かとの縁を切ってあげましょうか？ああ、親とは駄目ですよ？それやると俺、やばいですから」

本当はただで縁を切るのはいけないことだ。なぜなら、無料でエソキリをしていると後々厄介なこと（人は不幸要素だけの断ち切り願望多し。以前説明した通り）になるからだ。

「そうですか、それならちようどあなたにお頼みしたい人がいるのですよ………今、ちよつとでてますからいないので………宗家に行くよう伝えておきますよ」

「ああ、それならここにくるようについておいてください」

俺は自分の住んでいる家の住所を渡した。

「おや、こちらに引越してきたのですか？」

「まあ、ちよつと色々とありまして………」

「ははあ、どうせお客さんの切ってはいけない縁を切ったんでしょっ？」

鋭いが………はずれである。

「違いますよ」

「そうですね……今、顧客をさがしているようですが……女性
は物で釣るとよく引つかかると思えますよ……ま、がんばってく
ださい。他にお客が来たのでこれで……」

そういつて先輩は新たにやってきた参拝客のほうに向かっていっ
た。

「……なるほど……確かにやってみる価値はありそうだ……」

俺は今、机に座っている。そんな俺の目の前を一人の女性を通り
かかる。

「ああ、そこのお嬢様……（ちょっとやりすぎたかな？）」

「何？私のこと？」

「……そう、そうですね（嘘！？引つかかった！）あなた、ストーキ
ングされてませんか？」

「え？あ、あなた占い師か何か？」

女性の顔色が変わった。

「今ならその不幸な縁、私が断ち切ってあげましょうか？」

付け髭をつけ、サングラスをしている。はたから見るとめちゃく
ちや怪しいのでもしかしたら誰かが警察に俺のことを連絡するかも
しれないが……一人でも顧客を作っておけば問題はないだろう。
そのまま親しくなって……ニヒヒという展開も考えられる！

頭の中でそんな計画を立てていると

「ほ、本当に切ってくれるの？」

「ええ、そうですね……」

「いんちきじゃないでしょうね？」

やはり、警戒深いか……落ちない城を落としたときは嬉しいか
らがんばるか……

「そう思いになるなら今回は無料です。私の力をパンチラのように
見せましょう！」

無料と書いてタダと呼ぶ……どっかの小説のタイトルみたいな

言い草だが…… 女性はタダという言葉聞き逃さなかった。さすが先輩のお言葉だ！

「わかったわ…… 手を出せばいいの？」

「いいえ結構です。しかしまあ、あなたはストーカーさんに大事にされているんですね？」

集中して見えるストーカーと思われる相手との縁の糸は結構太い。もうちょっと太かったら俺では手に負えなかったかもしれない…… 人の思いというものはそれほどすごいものなのだ。まあ、今回の場合は太いおかげで探しやすいけど。

「…… あなたはただ、目をつぶっているだけでいいのです」

相手が目をつぶった隙に俺は日本刀の柄を取り出して横に一閃する。糸は見事に断ち切れた…… まあ、今回はあっさりとしてくれていたおかげで助かったな…… この土地での初仕事としては上々といったところか？ 地味すぎて面白くもないな……

「これで…… 終わりです」

「え？ もう？」

「ええ…… まあ、はじめは嘘だと感じるでしょうが…… これは事実です。そうですね…… 事実だったらあなたの知り合いの女性に私、エンキリのお話をしておいてくださいね…… ではまた……」

俺の視界にちらりと警察の姿二人確認できた。そして、怪しい男がちょうど出てきて助成が一人の警察を捕まえてあの男にストッキングされたといってその場で取り押さえられる…… とまあ、こういうのが縁を切った効果だ。二人とも警察と縁が出来たというわけである。しかしまあ、それにしても初めてにしてはかなり地味な仕事だったなあ……

俺は遂に始まったエンキリ生活に嘆息しながらも帰路についた。

第三話 エンキリと学校（前書き）

さて、これからは登場人物も増えていく予定です。前書きではメッセーじや評価をしてくださった人たちにお礼をしていききたいと思います。

第三話 エンキリと学校

三、

よいこのみんなあ、霧耶お兄さんだよ？前回、霧耶お兄さんが初仕事を成功させたことを覚えてるかなあ？前回の仕事の結果だけど……………どうやら彼女は他の土地の人だったようで……………都会に戻ってしまいあまり意味がなかったみたいだ……………ああ、名前ぐらい聞いておけばよかったなあ……………今のところ閑古鳥という新種の鳥が霧耶お兄さんの家に来ているようでひっきりなしに鳴きっぱなしさ……………いつまでこんな生活、続くんだろ？

家にいても暇だ……………というわけで、学校に行ってみよう……………学校の生徒たちを顧客にしちまえばいいだろう。この転校はもとから決まっていたことだし、少々予定が早くなっても大丈夫だったようだ。しかしまあ、まだ四月だ。転校生はおかしい存在である。

「えゝこの季節には珍しいが転校生を紹介しよう。率尚加高校からやってきた縁切霧耶君だ。みんな、仲良くするように」

「縁切霧耶といいます。これからよろしく願います」

できるだけ他人を見ないようにして後ろにある小さな黒板を見ながら話しをすることにした。別に花も恥らうお年頃というわけではない。この教室の中にちよつとばかり心してみないと

「うわっ！？」と叫んでしまうような縁の糸を持つ相手がいるかもしれないからだ。転校初日からぎよつとしていたらおかしい人物だと思われる可能性がある。

先生はどうやら堅苦しい先生のように、俺の簡素な挨拶に

「好きな食べ物とかは？」などつつこんでこなかった。

「縁切君の席は……………ああ、すまんね……………今日、風邪をひいている人の席に座って欲しい……………明日までには君の分の席をその隣に配置しておくからね」

指差された席は窓から一個離れた席だった。まあ、無難な場所だろう。奇異の目で……そりやそうだ、背中に唐草模様の竹刀袋をしょったままだからな……見られていることにもめげず、俺はその席に座った。隣にはちよつと暗めの印象を受ける女の子が俺をチラッとだけみてきたので俺は

「ニカツ」というさわやかな顔をしてあげたのだが……相手はおびえたような目をして俺からあつという間に目をそらした……どうやら、この人とはお友達になれないようだ。

「ん？」

ちらりと隣の女の子を見たのだが……なにやら不穏な縁の糸を見たような気がした。今はまったく見えていないし、気のせいだったかもしれない……ま、いいか。

お昼休み、俺の周りには当然のように人だかりが出来た。主に男子なのがしょうがないとは思うが……女子が集まってくれないのは縁がないからだろうか？

「へえ、そうなんだなあ」

「ところでさ、霧耶、お前自分の股間を見てみるよ？」

「うわっ！ 別世界につながる扉が全開！？これが奇異の目の正体か！？」

「俺さ、お前見てこいつは大物が転校してきたって思っちゃったぜ？」

「なるほど、これじゃ縁があるうがなろうが女子が近寄ってくるわけないな」

「霧耶、お前がお馬鹿さんなのはよく理解できたぜ」

まあ、こんな感じで一応は打ち解けることが出来た。これに関しては問題ないので省略させてもらおう。問題が起こったのはこの後だった。扉が開いてたことも問題だけだな。

家に帰ろうとすると何か書き物をしている一人の男子生徒の姿が

映った。

「ん？」

名前は覚えていないが俺に話しかけてきてくれた一人だっと思うのだが……その人物からは物凄い運命の赤い糸が見えた。

普段は小指から伸びている程度なのだが……それは彼の体をがんじがらめにしており、三本ほどの糸が混ざって一本になっているのだ。さらにメートルほどの太さの一本の赤い糸が……いや、もう柱といったほうがいいかもしれない……彼の背中から伸びている。なに？これ？生まれてはじめてみたよ……運命の赤い糸についてより……運命の紅い意図？

「あゝごめん、その君……」

「え、ええと……縁切君何かな？」

放っておくのもなんだか恐かった（ぶっちゃけ、運命の赤い糸を持つていてうらやましかった）ので話しかけることにした。むう、一人に対して一本が基本の赤い糸を何故この人物はこんなに持っているのだ？全世界のもてない男がこの人物の赤い糸を見たら怒り狂うに違いない。俺？俺は勿論見えるから嫉妬に狩られてますね

「わりいけど名前忘れちゃったんで教えてくれないか？」

「ああ、名前まだいってないよ？」

「……」

気まずい沈黙の後……

「僕の名前は天道時雨てんどうしぐれって言うんだよ。時雨って呼んでかまわないから……」

「なるほど、時雨というのか……なあ、ちょっと時間あるか？」

俺はその時雨という男子生徒を呼んで廊下に出た。そこへ、一人の女の子がやってきた。

「時雨、早く帰るぞ？」

「え、うん……」

「……」

そして、俺はその人物を見てぎょっとした。

赤い糸が……いや、赤い柱がその女の子につながっているのだ。

ああ、なるほど……この人が運命の相手なのか？それにしてもちよつと太すぎやしないか？俺のあれより太いなんて……まあ、そんなことはどうでもいい。

「こいつは誰だ？」

「ああ、この人は今日この高校にやってきた縁切霧耶君」

「……どうも」

しっかしまあ、数奇な人物だな、この天道時時雨とやらは……ぼさつとしているような雰囲気も受けるし、甲斐性無しのようにしか見えない。初対面の相手に少々失礼かもしれないが……まず真つ先に詐欺師に目をつけられそうだ。俺だったら狙うね

「時雨、変なことで呼び止めてすまなかった……どうやら俺の思い過ごしたったようだ」

「え？うん……僕は用事が出来たから……じゃあね……何か困ったことがあったら聞いてきて構わないよ」

そう言つて時雨とその女の子は去つていった。

「うつむ、世の中には想像を絶するような人物がいるんだなあ……つか、うらやましいよなあ、あんなに赤い糸があるなんて……黙つて切つところかな」

「ええと、すいません……」

一人ぶつぶつ言つていた俺の耳に一人の女の子の声が入ってきた。振り返るとそこには俺が友達になれないと確信したあの暗めの女の子が立っていたのだ。声が鈴のようだ。

「えと、何かな？」

「あの、お兄さんから聞いたんですけど……あなたが人と人との縁を切る者つて言っている霧耶さんだったんですね？」

「ああ、そうだけど？」

どうやらこの相手は俺の知り合いの妹さん……か何かだろうか

？相手は興奮してきたのか胸の前でグーを作ると俺に詰め寄ってきた。

「ええと、いくら出せば縁を切ってくれるんですか？」

「え、えっと……」

ここで肝心なことに気がついた。初步的なミス……つまり、値段を決めていなかったのだ。貴族相手には法外な値段をふっかけたりするのが常道なのだが……

「え、えっと……」

「いくらです？」

気がつけば廊下の隅に追い込まれており……相手は俺を下からねめつけている様な感じだ。なんだか新しい世界に目覚めちゃいそうだ。はたから見たら巷で今噂のかつあげという奴に違いないと思うだろうな。しかし、俺の中の灰色頭脳にまるで高化学兵器を次々と避けるような超能力パイロットがたまにおこす

「ぴぴーん」という青い光が一つ差した。

「え、えっと……俺の友達になってくれれば今回はタダ」

「わかりました！今日から友達ですね？」

「あ、ありがとう……」

ま、まあ……見た目と中身って違う人が多いって聞くけどあれって本当だったんだな。

第四話 エンキリのお仕事（黄昏）

四、

一人暮らしの男子生徒の家にとっても可愛い女の子がやってきた！日はだんだんと沈んでいき……一つ屋根の下には花も恥らう女の子と二人きり……二人を邪魔するものは一人もない。ああ、なんて燃える、いや、萌えるシチュエーションなのだろうか……ま、実際のところはデスクワークと実技が混じったなんのことはない、ただの縁切りのお仕事の依頼だ。こんな桃色妄想ピンク仮面な状態でいたら成功するもんも失敗しちまう……気合入れていくとしますかね〜

目の前にいる人物に座布団（自腹で購入してきたもの）とお茶（これまた自腹）にお菓子（和菓子って意外と高いんだよね〜）を差し出した。今、目の前の相手は最中（もなかと呼ぶそうだ）に手を出している。ああ、そういえば後五日ほどに迫っていた許婚の件は見事にご破算となった。今日から友達になってくれた目の前の女の子のおかげである。だから、座布団にお茶、お茶菓子は当然の待遇なのだ。

「ふうむ、なるほど……」

俺は目の前の女の子、手野見結衣てのみゆいさんの話を聞いた。どうにも最近不幸続きでその始まりが家族旅行から帰ってきた後だそうだ。神社に行ったりしていたから何かに憑かれていたかもしれないと彼女はおっしゃった。そして、今は茶を飲んでいる。

ずばり言おう

俺は霊能力者じゃありません

「まあ、一応はみておくけど……」

集中して相手を余すことなくじっくりと見る。

「ん？」

あの時ちらりと見えた違和感……それは、小指についている運命の赤い糸が青色なのだ！なんだ？時雨のときといい、赤い糸が最近はやってんのか？

「なあ、手野見さんには誰か許婚とかいるのか？」

「許婚？そんな時代錯誤なことがあるわけないよ……」

「じ、時代錯誤ね……た、確かにそうだよな」

許婚ではないのか……じゃ、なんだろう？勝手に判断したりして後で取り返しのつかないことになったという例は数多く聞くからな……

「手野見さん、ちょっと待っててくれ」

「うん、いいよ」

手野見さんを一人残して俺は電話に手を伸ばす。この時間帯、母さんは夕飯作りに忙しいだろうから掛ける相手は少々苦手だが暇であろう親父がいいだろう。姉さんでも構わないが姉さんは機嫌の悪いときに連絡すると襲ってくるからな……

何回かの呼び出し音の後、男性の声が聞こえてきた。

『もしもし、霧耶か？どうした？』

「親父、依頼主の小指に青い糸がまきついているんだけど……どうしたらいいんだ？」

『知るか………といたいところだが、その青い糸、太さはどのくらいだ？お前のちっちゃな亀さんぐらいか？』

「違うわい！」

『ならば、今のうちに切っておけ………じゃ、俺は母さんの夕飯を食べるからじゃあな』

あつという間に電話は切られた。説明なしかよ！？しかしまあ、あんな父親のもとで育ってよくこれまで俺はまじめに育ったなあ……

目の前に座っている手野見さんにどうしたものかと俺は考えたの

だが……仕事に関しては嘘をつかない親父を信じることにした。
不思議そうな顔をしている手野見さんに告げる。

「う、うんとな……とりあえず……切っちゃうことにする」

「え、う、うん……よろしくお願い……」

まあ、あの親父のことだ。仕事のことで嘘はつかんだろ……

「私はどうすればいいのかな？目をつぶっておけばいいの？」

「いや、別に普通にしても構わない……そのかわり、絶対に動かないでくれ」

間違つて他の縁を切ってしまったときは大変だ……正直言つて、過去に一度幸福との縁を間違つて切ってしまったエンキリがいるからな……その相手はそりやもう、悲惨だった。金はすられるわ、どぶにはおちるわ、空から鳥の糞が落ちてくるわ……

俺は集中するべく……小指の付け根辺りの部分に刃のない刀で狙いをつける。

「……」

「ごくり……」

静寂があたりを支配し、聞こえてくるのは俺の心臓の鼓動だけだ

……

「せりや」

そのまま刀を振り落とし、俺は見事に青い糸を切り落とすことにした。しかしまあ、こちらにやってきて様々なものをみたな……柱並みの太さの赤い糸に、青い糸……これってどういうことだ？

「終わった」

「案外、あっさりしてるんだね？」

そりやまあ、そうだ。

お化けがついていたりするのなら準備をし、本人自体が清められてそこではじめて除霊が行われるのではないだろうか？門外漢なのでよくわからないが……そんなものだ。しかし、エンキリ行為は本当にあっさりとしている。糸を見つけてそこに精神の刃を当ててやれば……もっとも、そのことも実力しだいなのだが……すば

りと切れてしまうものなのだ。赤子の手をひねるようなものだと思うってもらえば幸いである。

「じゃ、そろそろ帰るよ」

「ああ、気をつけて帰ってくれよ？」

「うん！」

手野見さんはそういつて普通に帰っていったのだが……俺が思うに、ここでまた新たな縁が生まれるだろう。

あの青い糸がどういうものかはよくわからないが……とりあえず縁を切ればまた誰かとの縁が生まれるのである。それがどの方向性に伸びていくのかはまだわからない。勿論、切った俺にも何かしらの縁が生まれたのだろう（できれば金髪美人とお知り合いになりたいものだ）俺のことはこの際放っておいて構わないだろう。手野見さんに変な縁が出来てストーカーにつけられたりしたら可哀想だ。

それならば俺がすべきことは決まっている。

「手野見さん、言い忘れてたことがあった！」

「何かな？」

まだ第二の門を通っていないところで追いついて俺はそんな嘘をつきながら彼女の隣に立った。

「……女性だけのアフターサービス。俺、きちんと家まで送っていく」

「そう？　だけどそんなことしなくても……」

「いいって！」

「いや、こうしないと仕事上かつこうつかないからさ」

無理やりにもついていき……俺は新たな真実を知った。

歩いて一分経っただろうか？　いや、経ってないな。

「ここが私の家」

「……ああ、お向かいさんだったのね……」

目の前に立っていた家がなんともまあ……手野見さんの家だった。

ただ。俺は門の前でぼさつと突っ立っていた。

手野見さんは自分の家の門をくぐって俺に手を振った。

「じゃ、また明日！」

「え、ああ……………また明日……………」

家の中に消えた手野見さんに俺はため息を吐きながら家に帰ることにした。ああ、まあ、こんなに家が近くだとは思ってもいなかった。

「……………まあ、いいか……………」

俺も家の中に消えようとしたと……………

「本当にありがと！」

後ろを振り返れば二階の窓からそんなことを俺に告げてくれたのだ。ううん、こういわれるとすごく嬉しいんだよなあ。さて、今日は仕事も終わったからさっさと寝るかなあ。

だが、俺は長い長い夜がこれからであるということをまだまだ理解していなかった。

第四話 エンキリのお仕事（黄昏）（後書き）

さて、どうだったでしょうか？今回……霧耶について細くしておきたいと思っています。霧耶はちよつとスケベな主人公であるということを伝えておきたいと思います。補足説明としては今のところそんなところで一人では立つことできない性格です。皆様、これからかどうかそんな霧耶の生活を見てやって下さい。

第五話 プシの自宅訪問（前書き）

タンポポさん、毎度毎度ありがとうございます！感想などをいただくやはり、うれしいものです。

第五話 ブシの自宅訪問

五、

拙者、名前を菅野川^{すげのかわ}焰華と申す。朝、起きると非常に体がだるく、ちよつとした風邪（体温計は40を示していた）をひいたようだった。どうも、先日の風呂の代わりに滝を浴びたのが間違いだったようだ……まあ、我が家秘伝の風邪薬を飲めばこんなもの午前中には治るに違いないから気にしないでいいだろう……

「エンキリ……ですか？」

拙者は今、箸を片手に昼食をとっている。薬が効いたのか、既に風邪は昨日のうちに治ってしまっているようだった。そして、拙者の祖父菅野川大源が拙者の前に座っている。厳しい表情をしているところをかれこれ十分はやっている。

「左様、エンキリという一族の一人がこの地にやってきた……気配としては後五人ほどいるな……」

厳しい表情をして大源様はそのようなことを言っている。大源様のような猛者が冷や汗を流しているところを見ると……かなり手練なのだろう、そのエンキリ一族とは……

「はあ……それで……その、エンキリがどうかしたのでしょうか？」

「そうじゃ、お主にはそのエンキリの坊主を倒して欲しい。手段はいとわぬ……あやつら一族には普通の剣術では勝てんからな……卑怯なこともしてくるからのう。まあ、実力はとても高いのじゃ」

冷や汗だらだらのところを見るとそれほど強いのだろうか？だが……拙者は拙者の道を行くべく、そのような手練と戦えることを嬉しく思う。

「……焰華！」

内心、喜んでいる拙者に大源様は私の名を唐突に呼んだ。ぼーっ

としていたので当然、返事は遅くなってしまう。

「は、はいっ――」

「わしゃちよつと厠に行ってくる」

「は、はあ……………」

そついうと大源様はいそいと去っていったのだつた……………ああ、なるほど、男とは大事な話があるときは生理的なことも我慢して告げねばならぬのか……………これが男の決断というものなのだろう！実際にいい勉強になった！

「ふむ、ここがエンキリの……………自宅か」

静かに、そして雄大に立派な日本家屋が拙者の目の前に現れた。まさか、これまで空き家だつたこの日本家屋がエンキリの『修行場』だとはぜんぜん知らなかつた。大源様が言うにはここでエンキリの男と戦つて負けてしまつたそうだが……………あの大源様を倒す相手とは相当な実力者！そのような相手と戦えるとなると拙者は心が高鳴ってくる！

「いざ、参らん！」

正々堂々と戦いたいのだが……………敵の情報も詳しく知るのが戦いでのだ。それならばいつそのこと寝ているところを不意打ちしてしまえばいいと思うかもしれないが、拙者の中では不意打ちを使つたりするのは集団で動くときだけであり、今回は一対一の戦いだ。誰だつて丸腰のときに戦つて勝てるはずがない。

築き上げられた趣のある壁を音もなく駆け上がつて拙者は庭に着地した。最近よく使われている防犯道具の類はなく、そこにあるものは広い庭に苔生した池……………広い庭には桜の木や梅ノ木が生えており、暖かな春風にその綺麗な花を揺らしていたりもする。

「……………ここは良い場所だな……………」

枝には鳥が止まつており、時折静かに鳴いている。そのちよつと赤つばい鳥の名前は良く知らないが、その鳥は人になれているのか拙者の肩に止まつてさえずつた。

玄関のほうから入ってはいないのでどのような感じなのかはわからないが、苔生している池の向こうには道場のような建物が見えた。少々寄り道をしてしまふようだがそちらのほうにはいつてみることにした。

「ほほう……………」

我が家が所有している道場よりも小さいが、管理が行き届いているのか床は綺麗に掃除されており、埃一つ落ちていない。日当たりの良い場所に設置されているのか……………窓からは日が差し込んでいて温かい。

竹刀や木刀もよく管理が行き届いており、数ある中にささくれなど一つもなかった。道具も大事にしているのか、そのエンキリ一族とは……………それならば拙者の腹は決まった！

「討ち果たすには十分な実力者！」

こうしてはおれず、実際にこの家に住んでいるエンキリという人物に会ってみたくなった。きっと、筋骨隆々とした大男なのだろう、「それまで少しばかりゆるりと休憩させてもらうか……………」

拙者は道場の一番日当たりの良い場所に腰掛けると目をつぶった。「しばしの間……………場を借らせてもらいます」

道場の主であろう、神棚に頭を下げて目を瞑る……………一時間ばかり……………時間をもらうことにしよう。

「ちちち……………」

「……………ん？」

先ほどの小鳥が私の肩に止まって鳴いていた。

「うるさいではないか……………はっ！！」

しまった！気がつけば時刻になっており、黄昏時になっている！拙者はどうやら寝すぎてしまったようだ！

「こ、こうしてはおられん！」

拙者はあわてて起き上がると神棚に頭を下げてその道場を後にした。そして、黙って家の中に入ってエンキリの姿を探す。大源様か

らは『明日の朝までには戻ってくるように』といわれておるのだ！
つまり、拙者に残されている時間はあまりないということなのであ
る。こうなったら不意をついて刃を首に当ててでも決闘の承諾を得
ねばならない！

人の気配がしたのでその部屋に張り付くようにしてふすまをちょ
っとだけ開ける。既に明かりがつけられており、人影が二つばかり
見えた。エンキリと思われる男は大源様よりやせており、弱そうに
も見えるのだが……

「……………手野見？」

そして、何故かそこには拙者の隣の席に座っている手野見結衣の
姿があつたのだ。エンキリとは知り合いなのだろうか？

「……………つた」

「案外……………してるんだね？」

何かしらの話をしており、どうやら手野見は帰るようだ。玄関の
ほうまでエンキリと思われる男が手野見を送っていく。見送つたと
思つたのだが、一瞬だけ鋭い目をすると思キリも玄関を出て手野
見を追いかけていく……………目の前に手野見の家があるので何か用事
があるのだろうか？

手野見と少々話し込んで去っていった。ううむ、人見知りする手
野見があんなに嬉しそうに話しているところを見ると旧知の仲なの
だろう。

「さあて、今日も疲れたから寝るとするか……………」

エンキリは自宅の玄関に入ろうとすると後ろのほうを振り返つた。
そこには二階から顔を出している手野見の姿があつた。

「本当にありがと！」

手野見は嬉しそうにそんなことをいって今度こそ本当に姿を消し
た。エンキリの顔は嬉しそうにしていた。

「さあてと、あとは寝るだけだなあ」

エンキリはそのまま自宅に消えていった……………

「ふう」

拙者の口からため息が出てくる。このようなことをするのは久しぶりなのでなまっているのだろう。普段だったら正面から突撃していくのが拙者の常日頃の態度なのだが……………慎重にことを運ばなければ打ち損じるかもしれない。

「うつむ、しかし……………」

隙があるとは思えなかったのだ。誰かに見られている気だつてする。

「おーい、そのあんた、俺んちでなにしてるんだ？さっきから一人で何言ってるんだよ？」

「！？」

そんな声がしたので後ろを振り返るとそこには……………エンキリの姿があった。

第六話 縁切りのお仕事（宵ノ口）

六、

俺の爺ちゃんは剣が好きだった。

いや、なんだか過去形になっているが、別に死んでいるわけじゃないので気にしないでもらいたい。

俺の爺ちゃんは俺と姉さんに剣術を仕込み、毎朝勝負をさせられた。一撃必殺という言葉が大好きな爺ちゃんは居合い系統の剣術を学びながらも実は侍よりも忍者のほうが好きだったりする。だから正々堂々という言葉など通用しない相手に卑怯結構、不意打ち万歳！と言っていた。もちろん、俺もそれに賛同だ。

手野見さんを家まで送って（目の前の家だったのだが）俺は自宅に戻った。

勿論、夕食を食べていないのでこのあとは夕食を作るという予定になっていたのだが、今日ぐらいはサボっても構わないだろう。

いそいそと台所に向かおうとすると、誰かがこの家の中にいることに気がついた。別に第六感が働いているというわけではなく、知つての通りこの家にいるのは今のところ俺だけだ。そして、さらにいうなら俺は今のところ俺自身の縁の糸をみることが出来ないでいるのである。そんな俺の目には誰かの縁の糸が映つたのだ。

「誰だ？」

もしかしてお客だろうか？そんなことを思いながら玄関のほうに歩いていくと……縁側の廊下に人影が見えた。どうやら下を向いてぶつぶつと何かいっているようだ。ここはまだ片付いていないところなので少々乱雑で割れているガラスだつてあるから素足は危険なのだが静かに近づいていくことにした。

「おい、そのあんた、俺んちで何してるんだ？さっきから一人で何言つてんだよ？」

「!？」

相手は驚き、こちらを急いで振り返ろうとして…………

「あいたっ！」

しりもちをついたのだった。しかも、それだけではないようで……
電気に照らされている手から血が流れている。どうやら、落ちていたガラスのかけらで切ってしまったようだ。

「いたた……………」

「ああ、すまん…………… ちょっとこっちに来てくれ」

相手の手を掴んでとりあえず危険なこの場所から二人して歩いていったのだった。

ガラスのかけらが刺さってなかったようで、よかった。相手に包帯を巻いてやりひと段落をついたところで先ほど手野見さんに出してあまった茶菓子と座布団、お茶を出してあげた。

「か、かたじけない」

「いや、気にしないで結構だ」

頭を下げてきたのでこちらもそれ相応の態度を示すことにした。
しかしまあ、はかま姿にいまどき珍しい長い黒髪なんて……………あとは刀を差してたら完璧に時代劇の人間だな。

「あんた、俺がエンキリってこと知っているのか？」

俺はおなが空いてきていたので余っていた最中に一つ手を出した。

「え、ああ…………… それをしてここまで来たのだ」

「なるほど……………」

お茶を飲んでいる相手に俺は確信した。このちょっと時代錯誤した侍娘さんはお客だ。お客とは何か…………… “神”だ。全知全能にしてお金という平和の“鐘”を鳴らしてお金を俺に恵んでくれる神様なのである。

「誰との縁を切りたいんだ？」

「縁を切る？おぬしは何を言っているのだ？」

きよとんとしているところを見るとどうやら、俺が考えていたようなことじゃないようだ。

「あんた、客じゃないのか？」

「え、いや、客なんだが………刺客だ」

「刺客？」

どうやらちよつと話しがおかしい方向に流れているようだ……

俺は相手に説明を求めた。ああ、客は客でも刺客なら最中なんて出さなきゃよかったな……

刺客………菅野川焰華は俺に決闘を申し込みたいとのことだった。

「はあ？」

俺の第一声はそれだ。それ以外に出る言葉などない。

「実力は承知の上！ぜひと、この拙者と雌雄を決してもらいたいのだ」

「初対面の相手に雌雄を決してどうすんだよ？」

「お願いだ！」

相手は土下座をしてそんなことを言っている。

「………あのなあ、どうやって丸腰の相手と決闘するんだよ？」

「刀が必要ならば拙者の刀を貸すから！」

「いや、俺じゃなくてお前」

「え？」

焰華は立ち上がり、自分の腰の辺りを見る。

「しまった！刀をどこかに忘れてきた！」

「………」

顔を真っ青にしておどおどしている。何、この人？これじゃ、バットを忘れて野球をするもんじゃないのか？ま、俺の場合は持参しているバットが常にあるから心配ないが……

「せ、拙者は………決闘に刀を忘れてくるなんて………武士の風上にも置けない存在だ！こうなったら切腹を………」

「切腹しようにもそれを実行する刀がないだろ？決闘はなしだな」

「……………」

膝についてよよと泣き崩れている。ああ、なんだかみていて悲しくなってきた。

「わかったわかった、決闘もきちんと受けてやるから！木刀で決着をつけよう！な？それならいいだろ？」

「うう……………かたじけない！」

鼻水と涙を混同しながら俺に引っ付いてくる

「うわ！汚いな！ひつつくなよ！」

うーん、これってもしかして手野見さんの縁を切ったから俺に出来た新たな縁なのか？まあ、この人も女だけど……………あんまり嬉しくない縁だな……………

道場の電気をつけ、相手に木刀を渡す。

「ほれ、あんたがどんな流派で何本木刀を使うかしらねえけど……………」

…とりあえず一本は渡しておこう。二本以上使いたいなら勝手にその箱から取ってくれ」

「拙者は一刀流だから一本で結構だ」

「そうかい」

相手と向かい合う。相手は上段に木刀を構え、俺は右の腰に短めの木刀を一本差して左のほうにも一本刺してそれを両手で掴んで相手を注視……………

「居合いか？」

鋭いまなざしで俺を見てくる焰華……………

「いいや、適当だ」

そこで俺と相手との会話はやんだ。縁を切るときと同じようにして辺りには静寂が訪れ、窓から入ってくる月光は蛍光灯の光と溶けこんでいる。

「……………」

「……………」

にらみ合いは続く……………しかし、この人物……………なんだって俺に決闘

なんて申し込んできたんだ？

「隙あり！」

考え込み始めた俺に相手は猛然と切りかかってきた。もともと、この決闘にやる気のない俺は相手の一撃を喰らって負けることにしようと思っていたのだが……

「のわっち！！」

どごーん

なんと、相手の攻撃をすんで避けるとまるで漫画みたいに床がえぐれたのだ！え、こ、こんなの喰らったら死んじまう！よかった、避けて……

「どうしたのだ？」

相手は涼しい顔でこちらを見てくる。うつむ、何、この展開？

第七話 零章の終幕、縁切りのお仕事（夜明）

七、

幼少の頃、俺は爺ちゃんの部屋に飾ってあった木刀に手を伸ばしたことがあった。少々、そういうのに興味があつたから手にしたのだが……ちょうどそこに爺ちゃんがいたのだ。爺ちゃんは笑って「お前を強くしてやろう」といった。それが俺にとっての地獄の始まりだった。ちよつとした血と鼻水とその他もろもろの液体が詰まつた今思い出してもしよっぱい過去のお話だ。

目の前に立っている焰華は勿論、幼少の頃から鍛えられてきた存在なのだろう。

「次は外さぬ！」

できれば外して欲しい。何故かつて？そりゃ、あんなのあたつたら夏場に木刀でスイカを叩き割るような感じだ。木刀なんてかんけいねえ、ありゃ、りっぱな凶器だ。

「待て」

「待つたなしだ！」

俺に飛び掛つてきて一撃を食らわそうとする。

恐ろしいほどのパワーファイターなのだろう、俺はそれをさつと避け、剣を自分の顔面に縦に構える……。そこへ、下に下ろされたはずの木刀が俺の顔面を横切りにしようとして襲い掛かってくるが、俺の木刀がそれをはじく。危うくしりもちをつきそうになったのだが……。そこはけなしのガッツで踏ん張った。

「やるな………」

うーん、まだ夏場のすいかわりで横に切られたスイカはみたことがないな。てか、そんな一撃をまともに喰らいたいとは絶対思わん。「……………ああ、ちよつと聞き忘れてただけだあんたなんで剣の道をつつ走つてんだ？」

このご時勢にまじめに剣の道を突き進もうという人はあまりないだろう。ま、俺たちエンキリは

「暴力に屈しないように」という理由でそれぞれがそれぞれ、何かしらの防衛策を持っている。

「知れたこと……強者と渡り合うため、ただそれだけだ！」

木刀を俺に向けてそう宣言する。うわ、かつこいいな……正直、俺には理解できんがね……

「そうかい、余計戦う気がなくなってきたぜ」

「やめるといえど、拙者は何度でもおぬしに挑戦するぞ。ストーカーになっても、おぬしとの決着をつけるからな」

目がマジだ。

「お前、ストーカーの意味わかってるか？」

「よくわからん！だが、なるのならば一流を目指すでしょう！」

こりやなんともまあ……熱く燃え滾っている目だろうか？ストーカーを極めるってあんた……極めたらどうなるんだろ？ま、本当にそうなったのならこいつを呼び出して縁をめちゃくちゃに断ち切ってやるう。ストーカーなんかいたらこちらの商売上がったりだ。

「じゃ、ここでまじめにあんたを討ち果たす！」

俺は再び、腰を低くして目を細める。木刀も腰に直して相手との距離を一定に保つ……

「……正直、攻撃をしてこないからがつかりしたぞ」

「……そりゃ、まあ、まだ一回も攻撃してないからな……俺、弱いもん」

避けて避けて防御して……そんなところだろうか？でもまあ、俺は相手の攻撃を喰らって

「ああ！最高！」とか言っちゃうような危ない感覚の持ち主ではない。

「たしかん、口ばかりだからな……弱い犬は良く吼えるものだ」
相手は期待はずれだとばかりにそんなことを言ってくる。それに對しての反論はしない。なぜなら、それは事実だからな……小さい

頃は爺ちゃんの稽古から逃げるために強くなった。いかにして相手の行動を防ぐか、そればかりを考えて成長してきた……

「ここでおぬしをこの木刀のさびにしてくれよう！」

「ごめん、それ無理だわ……」

「うおおおおお！！」

「だって、木刀はサビねえからよ！！！」

俺は思い切り相手の木刀に小太刀をぶつけ、それを相手の足元に投げつける。小太刀をぶつけられた木刀は起動を左にそらしてその隙に左手で長い木刀をつかって相手の腹部を瞬間最大加速で突く。

「ぐう……」

途中で手を離しているので相手は中途半端に意識を保っており、すぐさま横なぎをしてるところで……俺は相手の胸倉を掴んで壁に放り投げた。

「でやああああ！！」

ああ、ちなみに余談だが……投げ技などをするときはきちんと相手を掴んであげないと思わぬ大怪我をしてしまうのがよくある。みんな、相手を思い切り投げるときはきちんとそのあとのことを考えてつかんであげようね

「……さ、これで終了」

壁に当たってそのまま動かなくなったと思われる焰華に俺は告げた。

「……死んでねえよな？」

殺人罪だ。決闘だから相手が死んでもしょうがない……いや、その時点で果し合いか……決闘罪に殺人罪……こりゃ、ちよつと洒落にならん。わらえねえ……

「あいたたた……」

女の子を背負って外に行こうとすると危ない。最近、物騒だからな……結局、道場にあったタオルに水を浸してそれを相手の頭乗つけてやったのだ。既に意識は回復しているようで、相手は俺の膝

の上で覚醒した。

「男に膝枕した感覚はどうだ？俺はやっぱり女の子にしてもらいたいけどな」

目を覚ました相手に俺は声を掛ける。勿論、相手はぎょっとしていた。

「……………拙者は負けたのか？」

「ああ、お前は負けた。これでお前がストーカーになることはないな……………よかったな、一流のストーカーを指さなくて……………」

右足を勝手に見させてもらったのだが、ああ、実に白くて美しい足だったと伝えておこう。白い足にあったものは小太刀を当てたときに出来た青あざ。それは痛々しかった。ああ、やっぱこれって俺の責任だからな……………」

「悪いな、俺たちエンキリは勝てなきゃ意味がないんだ」

「……………お前らには武士道というものがないのか？」

「すまん、俺ってどっちかというと忍者のほうが好きだ」

「……………」

負けたのが悔しいのだろう、焰華の頬には涙がつたう……………」

「……………お前の敗因は慢心と技量不足」

「そうか……………やはり、拙者はまだまだ未熟だったか……………」

「ああ、そうだ……………」

しみみりとした感じなのだが、俺は非常に眠い……………あちらの世界の人たちが俺を眠らせようとまぶたの上で不思議な踊りを踊り始めているのだ。ううん、正直言つてこのまま焰華に倒れこんでしまいたいのだが……………初対面の相手にそんなことしたら折檻ものだ。

「今日は……………もう遅いから、早く家に帰れ……………負けたからって切腹するなよ？」

そろそろ夜も明ける頃だ……………エンキリの仕事に決闘なんてないかも知れんが……………結構ハードなお仕事だった。

「じゃ、最後に願いを聞いてくれ……………」

俺の意識が遠のいていくその間際、俺は焰華の言葉を聞いて適当

に頷いたのだった。人間、睡魔となく子には勝てないのである。

翌朝、気合と根性で起きるとさっさと学校へと向かった。それは何故か……手野見さんがどうなったのかを知りたいからだ。人と人との縁はそんな急に変わったりしないかもしれないが、念のためである。ああ、朝目を覚ませば俺の目の前には焰華がいなかったことを伝えておこう。

早めに学校に登校すると、やはり学校に生徒の数は少ない。見た目がまじめな手野見さんの姿は既にあり、そんな彼女に一人の男子生徒が手紙を彼女に渡していた。

「よ、読んでください……お願いします！」

そういつて男子生徒は俺の隣を通っていき……その後にはぼさつとした手野見さんの姿が残され、俺はよかったと思っただが……人生、そううまくいかないようだ。

「……どうしよう、これ……」

手野見さんは俺に山ほど詰まれたラブレターを見せてくれたのだった。

第八話 エンキリと縁切りの違い

八、

エンキリ：縁を切る一族が仕事をするときに自分たちのことを言うときに使う言葉。

縁切り：縁切りの仕事ではないときに使うエンキリの言葉。

この二つの言葉を理解できないという人のほうが多いのは俺たち、縁切り一族があまりメジャーじゃないからだろう。そりゃそうだ、切れない縁は腐れ縁だけ……そんな便利な一族がいればアイディア次第で何でもできるのだからな。

エンキリというのが俺の肩書きならば……今、目の前で木刀を掲げている相手の肩書きはなんだろうか？

「……焰華、参る！」

「……………」

エンキリの隣の席の女の子……そんなところか？それとも、絶滅危惧種、こういった特例を載せたレッドブックに載っている『剣道少女』といったところだろうか……

「おっと！」

ぼさつと考えていた俺の頭上に俺の頭を二つに分けようとする木刀が迫る。二つに分けられているのはお尻だけで充分だ！お知りが会ってお知り合い……なんちゃって！

「……やりますね、師匠！」

「そりゃ、弟子になったばかりの奴に負けたら師匠じゃねえよ！！」

さて、何故俺が焰華の師匠になったかという……それは数日前にさかのぼる。正確に言うなら、手野見さんにラブレターが殺到した次の日だろう。

「エンキリ、約束どおり拙者ともう一度だけ戦ってくれ！」

「は？」

日曜日とは何のためにあるか……俺の場合は寝るためにある。気がつけば俺の部屋の前に焰華が正座をしており、その頭を地につけていた。

「……………話が見えないんだけど？」

「……………この前、約束したではないか」

「したか？」

したっけ、そんな約束……………

俺のそんな態度に少々眉をしかめながら焰華は立ち上がって俺に木刀を投げつける。

「ああ……………そのような態度では拙者よりも一つ年上とは思えない」

「は？お前、俺と同級生じゃないか」

「そうだが……………飛び級だ」

俺の知能指数では飛び級なんぞ、無理だろうな。ああ、カンニングペーパーことカンペがあれば話は別だが……………

「とりあえず、来ちゃったものはしょうがないから……………相手はするぜ」

「かたじけない」

「負けたら俺の言うこと何でも聞けよ？」

そうすりゃいろんなことが出来るぜ……………二ヒヒッ

邪悪な笑みがにじみ出ていたことがわかったのだろう……………焰華は眉をしかめるとさりとてのけた。

「ならば、拙者が勝ったら……………エンキリは切腹しろよ？」

「ぐ……………」

目がマジだ……………きっと、俺が負けたときは介錯してくれるだろう……………いや、もしかしたら腹を切る前に首を飛ばされるかもしれん……………

「妥当だろう？」

「いや、死ぬだろ？」

こうなったら交渉をすることにしよう。いかにしてこの相手を……………

……によほほゝなことをできる相手にするか……

「ああ、それなら……俺が勝つたらお前俺の弟子になれよ」
「弟子？」

俺がいきなり提案したことに首をかしげている。

「そうだ、焰華強くなりたいんだろ？」

「まあ、それが武士の本懐だからな」

よし、ここまでは納得させることが出来たな……

「だから、強い相手の下につけば強くなれるだろう？」

「ならば、エンキリ……おぬしが負けた場合は拙者の弟子になるのか？」

「勿論だ、お前ほどの腕があれば弟子の一人ぐらいいても問題じゃないだろう？」

「………わかった」

勝った！俺はそのとき確信した……くくく……師匠が弟子に色々教えてやるぜ　そう、いろいろとな……まあ、その後は俺が勝つたわけなのだが、実際はそううまくはいかなかった。何故かって？　そりゃ、色々と事情があるのだ。

朝の練習が終わり、焰華と共に学校へと向かう。あれ？メインヒロインは手野見さんじゃなかったのか？ああ、あの人って実はサブキャラ？

「師匠、どうかしましたか？」

「いやいや、何も……ちよつと焰華と手野見さんの立ち位置を考えてただけだ。実際のところはどうかなのかと思っただけだな……まあ、いいや………気にするな」

「はあ、そうですか？」

こいつを弟子にしたのが間違いだったことに気がついたのは弟子にしたその日からだ。二言目には

「修行しましょう！」そして、三言目には

「決闘しましょう！」これはもうどう考えても頭の中がお花畑並み

の危ない存在だ。寝首をとられそうになったことはまだないが、箸を渡そうとすれば

「勝負の合図かと思った」と口を開いて言っし……とりあえず、棒状のものを俺が掴めばこいつは

「決闘のサインだ！」と頭が認識するらしい……相当、殺伐とした家で生活してきたのだろう……しかも、俺の家に泊まりこみを決行しやがったのだ。俺が後でできることといえば、こいつをさっさと破門にするか……免許皆伝の証をさっさとやっちまえば縁を切ることが出来るだろう。エンキリなんだから縁を切れればいいと思う方もいるかもしれないが、エンキリ一族の掟では「自ら招き寄せた縁の糸を断ち切ってはいけない！」と決められている。もっとも、俺の場合はまだ自分の円の意図が見えていないということもあるのだが……

「師匠！不良を見つけました！成敗しに行きましょう！」

「お、おい！」

「成敗！」

「ぐはっ！」

「……………」

正義感が強いのか、ちょっと目を離せばまるで正義の味方のように悪党を懲らしめにいくのだ。見た目が不良だという偏見だけで焰華は襲い掛かるのである……ちなみに、先ほどの見た目不良の少年はポケットに手をつつこんで歩いていただけである。

「成敗完了！拙者がいる限り悪の芽など根絶やしにしてやる！」

木刀を片手にポーズを決めている焰華の頭にチョップを入れる。

「あんぽんたん！」

「あいた！」

「一般人に暴力をふるうな！」

「む？なぜです？」

歪んだ正義感だ……正義の味方というものは悪者が何か悪さをしなければいけないものなのだ。暴力を一方的にふるうなんてちょ

つとやばいだろう。はあ、弟子が間違った方向に進んでしまったらそれは師匠の責任なのだ。

「いいか、こいつが何をしたんだ？」

「悪そうでした」

「それが成敗理由か？」

「そうです！」

「おいおい、そりゃ駄目だろう？」

「なぜです？」

あゝもう、こいつはあれだ、その、何だ……自分が正義、力が正義と思っっている節があるぞ……

「とりあえず、学校に行ってきつちり教えてやる！」

俺は焰華を掴んで引きずって学校に行くことにした。

午前のよく晴れた日……それは新たな話しの始まりだったかもしれない。

第九話 エンキリと親戚（前書き）

久しぶりの更新となりました。忘れちゃっている人はお手数ですが初めから見てくださいね 感想、メッセージどちらでもぜひ送ってもらいたいと思います。

第九話 エンキリと親戚

九、

家族がいればやはり、親戚というものがいるのは自然だ。勿論、俺にも親戚というものが存在しており……俺より年下が何人かいる。一番年齢が近いのは一歳年下なのだが、変わった連中が多いのはやはり、家系だろう。その親戚も変わった人物で……金持ちとの結婚を破棄。ずったずたに縁の糸を切断したそうだ。最後に会ったのは……一年以上前だろうか？

『二年三組縁切霧耶君、ご親族がおいでです。今すぐ職員室まで来てください』

「ん？」

学校でこのように放送された人はわかると思うが、こういうものは他人の注目を集めるものだ。それがイケメン転校生ならばなおさらだろう。

「縁切、寝癖つけながらポーズとってないでさっさと職員室に行ったらどうだ？ しかもなんだ？ 何で窓から出ようとしているんだ？」

ち、ばれちまったか……俺は理由を友人Aに述べる。

「おいおい、俺みたいなクールガイな転校生が廊下を歩いちまったら前女子生徒がときめいちゃうだろ？ ハートを狙い撃ちしちまわないようにしのんでいかねえとな」

「……焰華、あんたの師匠になった人って馬鹿じゃない？」

「むう、師匠は違った考えの持ち主なのだ」

おい、焰華……なにやら悲しそうな目をして俺を見るな！

「つたく、走っていけばいいんだろ、走って……」

俺はそのまま廊下を颯爽と走ってかつこよく職員室に行こうとしたのだが……

「こらあ！ 廊下は走るな！！」

「……………すみません」

先生に怒られる羽目となったのだった。

職員室に着いた俺に担任の先生が告げた。

「遅いですねえ、何をしていたんですか？」

「いえ、ちよつと先生にわからない問題を教えてもらっていました」

先生、ボクは学校の廊下が箸つてはいけないということを知らませんでした！

「まあ、いいでしょう……………放送でも行っていた通り、あなたのご親族の方がお見えになられていますよ」

誰だろうか？俺は扉の前でふと考える。

ううむ、誰が来たによってか俺の今後の学園ライフがかわつちまうかも知れん。親父：ありえないな、あの人物が迎えに来てくれるとは思わん。母さん：重ねてありえないな。姉さん：いたずらにでも来たんだろうか？爺ちゃん：来たのなら俺を連れて行こうといや、逝こうとするのだろうな。ばあちゃん：俺に制裁を加えに来たのだろう。

どれもこれも穏やかなものではなかったので俺はひやひやしなから職員室の扉を開けたのだった。

「あ……………」

そして、俺の眼に映った人物は上の人物たちとは一応関係を持っている人物でもあったのだがあまり関係が無いといえれば関係が無いというような感じの人物だった。

例えるのなら？遠くに住んでいる親戚つて所だろう……………まあ、そのまんまなのだが。

俺の眼に映ったのは俺の親戚、古那優ふるなゆうだった。

「……………どうも」

「あ、ああ……………」

言いにくいというか、非常に恥ずかしいことなのだが俺はこの一年年下の女の子が非常に苦手だった。これまで会話が成立したことなど一度もなく、だんまりを決め込んでしまえば絶対に口を開いてくれないような人物だ。そういう人物が苦手な俺としては会っただけで顔色が悪くなるのは必然だ。

「……………先生、先ほど説明したとおり霧耶さんを連れて帰ります」
「ええ、どうぞ」

先生に頭を下げた優は俺の手を掴んで職員室を出て行く。

当然、手を掴まれている俺も一緒になって職員室を出て行き、そのまま廊下を歩くことになった。このままでは黙ったままでリードされてしまい俺は気がついたらがけの上から落とされていたような状況に陥るかもしれん！そんな馬鹿なことを考えながらも俺はとりあえず動きを止めることに最善を尽くすことにしたのだった。

「な、なあ、今日は突然訪問してどうしたんだ？誰かの葬儀か？」

「……………用があつたんです」

「ええと、何だ？」

そつたずねるとまるでほこりをみるような視線をぎこちなく俺の目に合わせて告げた。

「……………先日、エンキリー族上位十名に名前が入った」

「へ、へえ……………ってなに！！？何位だ？」

「六位……………」

6とは1、2、3、4、5の次に来る数字である。

さて、そんなことはどうでもいいと思っている読者の皆さんは覚えているだろうか？俺は第5番目で7、8、9、10の連中が俺のことを監視していると以前言っただということ……………第6番目の説明を忘れていたのだが、第6番目の席は開けられていた。

順位を決定するには半年前からの準備をかけて儀式が行われるのだ。その儀式で見事に成功すれば見事順位を勝ち取ることが出来るのである。ちよつとおかしい話だが自ら順位を抜けるといわない限りその順位は変わらぬままである。まあ、うちの一族はプライドが高い

がそういうところはきちんとしているので自分の力が弱くなったと知るとすぐに自分の位を下げる傾向があるのである。

「つまり、6位となった優は……………」

「……………霧耶さんのお目付け役となりました」

「おめ、お目付け役！？」

監視者との違いはいちいちつつこんでくるところだろうか？もともと、この古那優というエンキリは一族の中でもずば抜けた能力を所有しており、宗家の人間ではないが能力だけでここまで上り詰めたといっても過言ではない。古那家とは親戚と言っていたが遠い親戚であり、血がつながっているのかさえ怪しまれていたりもしたというほど疎遠だった家系なのである。

「……………で、でもお前この前許婚との一件で無断外出とか駄目になっただろ？何でここにいるんだ？」

俺と同じように優は自らの許婚との縁を切り裂き、その結果俺とは違って家に軟禁されていたそうだ。反省文を用紙何百枚か書かされたと聞いている。

「……………終わらせました。その結果、私はあなたのところに心を入れ替えたものとしてあなたを諭すように言われてやってきたのです」

「……………」
「……………実際のところはそのようなことはしません。ですから、安心してください」

珍しく優にしてはしゃべっているほうだろう。昔は

「うん」とか

「はい」とかしか言わなかった。ああ、そっぴや一度も否定をしたことなんて無かったな。

「本当にそれだけのために来たのか？」

「……………鋭いですね、実のところはそれだけではありません。霧耶さんのお姉さんが後ほど仕事を持って霧耶さんのもとへとやってくる予定です」

なるほど、実力者ぞろいのところへ姉さんが仕事を持ってくるの

か……………つて！

「ね、姉さんがこっちに来るんだって！？」

俺はたまらず優の両肩を掴んで顔を目一杯近づけて優に尋ねる。

普段は眠たそうにしている両方の目が最大限まで開かれており、意外と大きくてくりつとしたかわいい目であることが判明した。

「……………え、ええ……………そのように伝えておいて欲しいと、だから霧耶さんが相対できるようにここまでやってきたんです」

「そうか、ありがとう……………」

俺の姉さんは非常に風雅人で、部屋を散らかすのが得意という姉さんはクリーンで清潔感あふれるこの俺にとっては天敵のような存在なのである。ましてや、あんなだっ広い家にきちんと

「お姉さまの部屋」と扉の前に張り紙を張って上げなくてはあの人は家中を間違いなくごみにしてごみ屋敷にしてしまうだろう。

俺は優の手を掴むと町内の清潔と俺のクリーンで最高のイメージを守るべく、昼からマラソンを開始したのだった！急げ、俺！俺の清潔は俺の両肩にかかっているのだ！

第十話 エンキリと優のお料理

十、

古那優、俺より下だから……ええつと、年齢は十五、六だろう。年齢よりも下に見られたりすることがよくあり、それは外見上幼いからであろう。

元来、寡言なところがあって人見知りもするのか、正月なんか目を合わせただけで下を向くような子だった。姉さんとかにもなつくことなく、ただただ俺の近くにいて俺が他の人と遊んでいるのを優がじーっと眺めているといったことも幾度と無くあったな。そんな優がもってきた知らせ、いつかわかんが恐怖の大王がピンポイントで俺の家に舞い降りるそうだと聞いたのは午前中のことだった。

「師匠、今日はお祭りでもあるのですか？」

時間帯は夕方、忙しい主婦の方々は夕飯の買い物などに勤しんでいる頃合だろう。

「いや、違う……俺の姉さんがくるんだ」

「姉さん？師匠の姉上ですか？」

「ああ」

「なるほど……客人を迎えるために掃除をするのは思えば当然の行為ですね」

「ま、そういうことにしておいてくれ」

ひと段落つき、焰華の隣の部屋に

「偉大なるお姉さまのお部屋」と書かれた看板を取り付ける。うん、これでなんとかいいだろう。

「……霧耶さん、こちらも終わりましたよ」

「う」苦勞さん

「……師匠、この方が師匠の姉上ですか？」

きょんとした表情で焰華は優のことをみている。そういえばま

だ紹介してなかったな。

「ああ、この子は俺の親戚の子で古那優って名前だ。今日から居候する予定だそうだから仲良くしてやってくれ」

「……………古那優です、よろしくお願いします」

「拙者の名前は菅野川焰華と申す。こちらこそよろしく……………」

両方とも頭を下げてうまく挨拶をしているようだ。さて、今日姉さんがくるかわからないが一応、夕飯は姉さんの分も作っておくことにしよう。

「さ、二人とも夕飯作るから手伝ってくれ」

「了解しました」

「……………わかりました。お二人は私のサポートをしてください」

俺と焰華、そして優の三人で調理場に立った。今日の献立は姉さんが来るかもしれないというので普段よりも豪華なものを作ろうと決めていた。普段は精進料理を焰華が勝手に作っているので冷奴やら山菜の煮つけなどだけだったが久しぶりにうまいものでも食えそうだと期待していたのだが……………

結果を言おう、三人で出来た料理は酷いものだった。

「こげた魚にこげた肉料理……………炭のサラダってところだろうか？」

「いえ、師匠……………これは火事場の料理のフルコースといったところでしょう？」

優に聞こえないように俺たち二人はささやきあった。

「……………」

言いたくないが、原因は優にある。

普段から料理をしていなかったのだろう、だからはつきり言って足手まといもいいところだった。

俺たち二人は最後まで優を信じてサポート側にまわったのだが、結果は大きく裏切られるものとなったのだ。

久しぶりに会った……………というか、殆ど話なんてしたことなかった相手を責めるのもなんだか心苦しかったので俺は黙って、焰華も同じように料理をしたのだ。その結果、連帯責任なのか、はたまた

厳しい愛情を優に注がなかったためか、とりあえず食うのも一苦労というゲテモノ料理が出来てしまったのである。ちなみに、姉さんだったら何でもおいしく食べてくれるだろう。

「と、とりあえず……………」

処理するか、食べてしまうかのどちらかを選択したほうがいいだろう。前者を選べば優が間違いなく傷つくであろうが俺たち三人の健康は損なわれないだろう。そして、後者を選べば優の心は救われるだろうが、俺たちの健康は救われない。

「し、師匠……………」

アイコンタクトを送ってくる焰華に対して俺はどう対応すべきか困っていた。勿論、心も大事なのだが体も大事だ。

「……………食べないんですか？冷えてしまいますよ？」

優は既に“これ”を食べる気でいるようだ。

「し、師匠！」

焰華は俺に訴えかけてきている。これなら焰華の精進料理のほうがまだましだろう、いや、月とすっぱんの違いがあるはずだ。

「……………焰華、武士たるもののどのような敵にも臆せず、つつこむのが道理……………」

「で、ですが……………」

「確かに、ただ敵軍につつこんでいくようなものは武士とはいえない。昨日の敵は今日のともってこともありえるから……………この敵たちは見た目はワイルドでとげとげしているかもしれないが……………意外と心優しいもの達かもしれない。見た目で決め付けるな、終わった後にあれもいい体験だったなあって思えばすべてのことが救われる！」

俺は自分の分の箸を手にとって焰華に告げた。

「我に続け！世界は終わりを求めず！真理とは常にそこにあるものなのだ！！」

「わかりました！！」

自分でも何言っているかわかなくなってきたのだが、俺は無我

夢中で食事を始めたのだった。

「いただきます!!」

俺と焰華は相手に対して宣戦布告し、箸という一本の太刀を持って敵軍の中に突っ込んでいったのだった。

「ぐはあっ!!」

世の中には……恐るべき敵が数多存在するということを久しぶりに知った。俺の舌は既に未知との遭遇で混乱状態。うまく呂律が回らない上にその舌には宇宙が存在するかのようだった。そして、師匠と弟子という関係上の焰華ともその後に一戦交えたのだった。

「し、師匠……」

「ついでに言うなら腹痛もだけだな」

ここにくるまでには様々な障害があった……ここは一応俺の家なのでなんとしてでも所有者として焰華には勝ちたかった。この古臭いぼつとん便所の最初の所有権を手に入れたのはそう、俺だ。

「し、師匠、は、早く変わってください! 何かが生まれそうなんです!!」

「そうか、俺は今出産中だ。あゝ死ぬかとおもったあゝ」

「拙者、し、死んでしまう可能性が出きました!!」

生まれ行く混沌たちに俺は別れを告げて涙目になっていた焰華に聖域の権利を渡したのであった。

「ふう、なんとかこれで死にそうには無いな」

立ち上がって優のいる台所へと向かった。

「……料理、どうでした?」

はじめてあったときとまったく変わらないどこか眠たそうにして
いる目をこちらに向けてくる。さて、どう答えたものだろうか……

「……あゝあれな、ちよつと……まずかった」

「まずかった……そうですか……」

あからさまにがつくりきっている優に対して、俺はあわてて付け加える。

「いや、そうじゃなくてあのタイミングで酢を入れたのはまずかったって意味だ！」

「……………なるほど、精進します」

メモ用紙を取り出して、優はなにやら書き込んでいるようだった。

「……………霧耶さんは料理が出来るのですか？」

「ん？まあな」

俺の家の人たちは多忙で、ちょっとした料理ぐらいなら（姉さんを除いて）誰だって出来る。これはもう、生きていくうえでやるべきことだからな。

「では、焰華さんも？」

「ああ、料理は作れるぞ。普段焰華が作ってくれてるからな」

とつてもヘルシーな料理をな。

「……………なら、私は料理で霧耶さんを超えて見せます、覚悟してください」

なんだかよくわからないまま、俺は優に宣戦布告されたのだった。

第十一話 エンキリ姉、降臨

十一、

世界ってものは広いのか狭いのか、俺にはわからない。

広いと思う人がいるのなら世界は広い。

狭いと思う人がいるのなら世界は狭い。

つまるところ、この世界の大きさを決めるのはその世界に住んでいる個人個人のものさしで決められるってことだろう。

俺？俺にとってこの世界は………今、ものさしあてて考えてる途中ってところだ。

「さあ、今日も一日よくがんばった………あの退屈な数学の教師の時間を見事に耐えて見せた俺に皆、盛大な拍手を送ってくれ」

「………霧耶さん、霧耶さんは早退しましたよね？」

「………焰華、お前の師匠はよくやった………そうだよな？」

「いえ、師匠………今日の師匠のがんばり具合は生まれたて小鹿以下だと思えます」

そりゃそうだ、小鹿は生まれてすぐに立つ練習をしないと肉食獣に食べられちまうからな………おっと、冷静な突込みを入れている場合ではない。

あれから………そう、残飯処理と思われるような行為を三人で終え、俺たちは俺、焰華、優の順番に風呂に入って風呂上りのまったりとしている時間を過ごしているのである。本当だったらこの時間は焰華と稽古をしている時間なのだが、姉さんについての予備知識が無い焰華には姉さんの取り扱いについて教えるという時間が必要だったのである。決してさぼりではないということを付け加えておこう。

「………して、師匠の姉上とはどういった方なのですか？」

「そりゃ、俺の姉さんだから………」

「…………一言で言うなら変人ですね」

おいおい、優…………それじゃ俺も変人みたいじゃないか？

「ああ、なるほど…………」

焰華、俺を見て頷くな。俺から言わせたらお前ら二人とも変人だからな。

「ともかく、俺が不在のときに姉さんが来たら…………まず、茶菓子とお茶を必ず準備しろよ？へたすりやお前が食われるぞ、焰華。お前、おいしそうな感じだからな…………」

「霧耶さん、変態ですね」

うん、実に夜に楽しみたいおいしそうな体つきだつて……

「優、俺は残念ながら初対面の相手でも家から放り出すほどの凶太い神経は持っていないが、適当なことをいうと明日の朝からの食事はインスタントになると心がけていてくれ…………ともかく、食われるかもしれないから気をつけろとは優、お前にも言っておくぞ」

大真面目に告げる俺に優は

「わかりました」とだけ言つて自室へと戻っていった。

それに対して焰華は首を傾げるしかないようだった。

「食われるつて…………まさか、化け物か何かなのですか？エンキリなんですよね？」

「ま、れっきとしたエンキリなんだが…………ちよつと特殊な感じだね…………縁を切るのがエンキリなんだが…………俺の姉さんは他人の縁を吸収するつていうありえん能力が付加されているんだ」

ゲームで言う特殊能力だろう。

まあ、エンキリつていう能力も充分特殊能力だと思われがちなのだが、魔法使いだと思つてくれ。

連中は魔法を使って攻撃するが、それ自体は不思議なことじゃないだろう。だが、姉さんを魔法使いにするなら、まず攻撃して相手の体力を減らしたあとに一度に状態異常と姉さん自信の体力を回復した上に体力の最大限を上昇。さらに攻撃力や防御力なんかもあげちまうという勇者もびっくりなスキルを所持しているのである。

「正直、姉さんは怖いぞ……………」

「そ、それほどは……………」

さらに、俺は姉さんの怖いところをあげることにした。敵と戦う前には相手の情報を押さえておくのは常識だろう。

「まず、部屋を散らかすな…………… ちよつとの間、一人暮らしをしていたんだが…………… 半年後には役所とかテレビ局とかが姉さんの家に来てた。モザイクでテレビには出てたぞ」

「それって…………… 散らかしすぎる人なんですよね？」

恐る恐るといった感じで聞いてくるが、俺は頷いた。

「ああ、ごみ屋敷に早代わり…………… どういったマジックでごみを増やすのかわからんが…………… 一日に十キロ近くのごみを家に持つてくるんだ。これは恐ろしいぞ……………」

「…………… ゴキとちゅーが夜中徘徊してそうですよね」

「いや、姉さんはそういうのが苦手というか、嫌いみたいでな…………… 発見したい、生体反応が消えるまで戦い始めるぞ…………… これまでの戦いの中で姉さんから逃げ切った連中は一匹もない」

「…………… 発見され次第、天国逝きか地獄逝きの列車に駆け込み乗車ということになるんですね？」

さらに徹底しているのが発見されたあとはゴキホイなどがゴキがあつまってそうなところにたくさん設置されていたりする。

「ま、そんなところだ…………… あと、どんなところでも生きていけると思う」

「と、いうと？」

「さっき俺たちが始末したあの真っ黒な炭みたいなものでも平気に食べる…………… てか、おいしそうに食べてくれるぞ？俺が小さい頃に初めて料理を作ったときに家族みんなに食べさせたんだが姉さんだけがおいしく食べてくれたからな……………」

「へえ、どんなゲテモノ料理でも大丈夫なんですか…………… すごいですね？けど、師匠はそこまで料理下手じゃありませんよね？むしろ、上手ですよ？」

誰だつてはじめはへたくそなのだ。

「ま、そのおかげである程度まで料理が出来るということになったんだが……姉さんはカビが生えていようが、不思議なきのこが生えていても食べちまうからな」

「……本当にすごい人ですね」

「ああ、ある意味超人だ」

「けど、性格とかはいいんですよね？」

「性格か……」

姉さんの性格……それはちよつと掴みづらいところだろう。

「ま、人によつて態度が変わるつて言つたほうがいいだろうな」

「え、なんですか、それは？」

「自分に敵対する相手には厳しい……てか、修羅。自分に優しくする相手にはとことん甘える。ああ、先に言つておくが『おねがい、やつて』とかそういうレベルじゃなくてまるで下僕扱いだな」

あゝ今思えばこうやつて一人暮らし出来てほんとうによかつたかもしれない……いや、焰華と優がいる時点で一人暮らしじゃねえな。

俺が考え込んでいるとどうやら焰華も考え込んでいるようだった。

「うゝん、実際に会つてみないとわかりませんね……ただ……」

「ただ……なんだ？」

「強いんですね？」

「勿論だ、あれに勝つには鍛え抜かれた連中を一個師団持つてきて対等……いや、一国と対等に渡り合うかもしれない」

「へえ、霧耶……あれつて誰？」

「そりゃ、うちの姉さんだ……」

ベタだとは思つさ……だが、姉さんの特殊能力を忘れていた……

……

「こ、この人が？」

「ね、姉さん……」

「霧耶、先を続けてくれて結構よ」

大人びた顔に抜群のスタイル……だが、何故か忍者の格好を

している……漆黒の髪の毛はポニーテールになっており、瞳は強い光をたたえている。

「焰華、紹介しよう……この人が俺の姉さん、縁切節佳だ」
えんきりせつか

「は、はじめまして……せ、拙者は……」

辺り一帯には禍々しいプレッシャー……焰華はそのプレッシャーに押されたのか、裏声で自己紹介を始めた。

「へえ、焰華ちゃんか……いい手足となってくれそうでお姉さん、嬉しいわ」

「ど、どうも……」

姉さんは一言そういうと姉さんの自室へと引っ込んでいき、俺たち二人は立ちすくんだ。

「た、たっているのも大変だった……あれは敵にまわしたくない」と語ったのは初対面の焰華の感想だ。

第十一話 エンキリ姉、降臨（後書き）

久しぶりの更新となりました。実は、この姉さんの話で縁切は終わりにしようかなって思っています。

第十二話 エンキリと動き出した縁（前書き）

そろそろ終わりも近づいてきたなあと思ってますが、面白いとかいう感想がきたらちよっと引き伸ばそうかなあと考えてます！出来たら感想のほうをよろしくお願いします！

第十二話 エンキリと動き出した縁

十二、

ゲームやっててどう考えてもラスボスに勝てなかったりする。いや、その前にラスボス前の敵に勝てなかったりするのが俺なのだが、正直言つて姉さんはレベルが低かろうが、武器が弱かろうがまず、勝てる。

何故かつて？そりゃ、おかしいことが起きるから。敵の攻撃とか表示はされるのだが、攻撃は外れてしまったとかそういうのが出る。恐ろしいほどの運の持ち主なのだ。アクション系のゲームだったらありえないほどの腕前を見せてくれるのだ。

そんな俺の姉さんがやってきた理由、それは弟の平安をただ壊しに来ただけじゃなかった。

起きた姉さんがすること、まずは顔を洗う。

「ふう、これでおきたって実感するわね……………」

「……………先に顔洗つてた俺を庭に放り投げるのは勘弁してくれ……………」

……………」

そして、次に飯を食べる。

「霧耶、ご飯がやわすぎよ。私は固めのご飯が好きなの。味噌汁はちよつと辛すぎだわ」

「……………その割には両方とももう五杯目……………こりゃ、焰華と優の分は俺の分を減らしてやるしかないか……………」

そして、最後に……………」

「ふう、おやすみ……………昼ごはんになったら起こしてね」

「……………」

ちなみに言うが、俺が目を覚ますのは四時半だ。姉さんも同じ時間に起床。ちなみに焰華は五時ぐらいに目を覚ましてまぶたを擦ることなく、しっかりとした歩調で起きてくる。

「おはようございます、師匠……………あの、なんだかげっそりとしてますが？まだ節佳さんは起きてきてないんですか？」

「……………あいにく、もう寝ちまったよ……………」

これはもう、夏場の通り雨以上に質が悪いとしかいえない。

「は、はいですね？」

「まあ、な……………」

優が起きてきたのは七時半……………しかも、パジャマは着崩れを起こして目を擦りながらウサギさんのぬいぐるみを担いでやってきた……………おはようございます」

「ああ、おはよう……………」

今日が休みではなかったらまず間違いなく遅刻だろう。既に焰華は木刀をもって道場で素振りをしているだろう。

「……………味噌汁ですか……………朝はいりません」

席に座ったのを確認すると俺はご飯と味噌汁を優の前に出してやったのだが、それを優は不機嫌そうに要らないとのたまった。

「ああ？味噌汁のまねえと力がでねえだろうが？」

「……………納豆だけで結構です」

何故、優が納豆だけを頼むかというと、若手のエンキリは納豆の糸をつまқтаちきることが出来れば将来有望だと考えられているからである。ほんとうかどうかはさっぱりなのだが、俺たち一族はこの話をマジで信じている連中がけっこういるのだ。

「……………目をあけたくありません」

「ったく……………ほら、口開ける。あゝん」

「……………あゝん」

冗談で言っただつもりだったのだが、優は俺に言われるままに口を開けた。しょうがないので俺は箸を使って優の口の中に入れてやることにしたのだった。

「……………まあまあおいしいですね。私の作った味噌汁に比べると味は落ちますけどね。今度作ってあげますよ」

「ははは……………それは期待して待つておくよ」

できれば姉さんがいる間をお願いしたい。

そんなやりとりをしていると焰華が戻ってきた。

「……師匠、今優が起きてきたのですか？」

「ああ、そうだ」

「……………エンキリー族とは変わっているんですね」

おそらくは俺のことを比べて言っているのだろう。優は食べ終わってからウサギさんを引っ張ってどこかに消えてしまった。

「ま、個人個人でばらばらなのが俺らの一族って感じだからな」

「……………師匠、稽古、付き合ってください」

「ああ、わかった」

その後、午後になるまで俺たち二人は道場で稽古試合をしており、優と姉さんは午前中一杯、一度たりとも姿を見せなかった。

「姉さん、ご飯が出来た」

「……………ん、わかったわ」

Tシャツ一枚という他人には見せられないような姿でベッドの中から這い出してきた姉さんに着るものを渡す。

「どう？この洗練された体に見入ってた？」

「いや、確かに男だったから見入るかもしれないけど性格知っている俺は見とれな……………ぐはっ!!」

「ご無体なけりが俺の腹にヒットして廊下の壁にヒビを増やしてしまった俺だった。」

姉さんだけが満足のいく昼ごはんを追え、昼からどこかに遊びにいくと考えていたのだが……………

「霧耶、仕事」

「仕事？仕事は今のところもってないけど？」

「私が仕事持ってきたの。霧耶に解決してもらわないと」

そういつて引き止められ、焰華と優も仕事場であるテーブルの前に三人で並んで座った。

「今日の午後二時、ここに一人の依頼者が来るわ」

「依頼者？」

「そう、私に依頼が来てるんだけどちょっと大変だね……………ここに来た理由は仕事を霧耶にしてみらうためなのよ」

「なるほど……………そうなのですか」

「……………」

焰華はそういうがこれはおかしい。大体、姉さんのほうが実力が上だし、俺がいても邪魔になるはずだ……………

優もそう思ったのか、姉さんに尋ね始めた。

「節佳さん、何故ご自分でなさらないのですか？」

何が重要な意味があるのだろう、きっと……………

「めんどいから」

「それ重要じゃないよね、姉さん」

「誰が重要な意味があるっていったのよ？」

頭がおかしいんじゃないの？って顔をしながらこちらを見てくる姉さんに対して俺は呆れるしかなかった。

「あのさ、難易度は？」

「ん……………五つ星ってところかしら？」

ちなみにエンキリ一族では最高で三つ星である。

「ねえ、それってやっぱり俺じゃ無理なんじゃ……………」

「うっさいわね！人の縁を切ってなんぼの私たちよ？特に、まだ結婚相手を見つけないって逃げ回ってるあんたを助けてあげるには皆に実力を示さないといけないの！これはあんたのためなのよ」

「そ、そうなの？」

てか、姉さんが俺のことを何気に考えてくれているなんて知らなかった……………

「いい？絶対に一回の断ち切りで縁を切ってしまわないと今回は霧耶に関わりを持っていて皆に被害が及ぶわ」

「……………」

なにやらシリアス展開になってきた姉さんの口調に俺はつばを飲

み込み焰華は固まり、優はせんべいをかじって舌をかんてしまった。

最終話：エンキリと縁（前書き）

今回で終わりになりました！皆さん、応援ありがとうございました！

最終話：エンキリと縁

最終話

自由とは何か……俺はそれを考えたことがあるのだが、結果として出てきたものは『自分自身にとつて都合がいいこと』だった。それを他の友人……依然いた場所のだが……にどうだろうかと伝えたところ、それは違うといわれてしまった。あいつに言わせるならそれは『勝手気ままにわがままを押し通しているだけ』ということらしい。それなら自由とは何なのかと俺はそいつに尋ねたところ、そいつは『少しの束縛があつてこそ、自由は存在する』と言つていた。

午後二時、約束の時間帯にやつてきた人物は一人の男子高校生だった。

「あれ？時雨じゃねえか？」

「ああ、やっぱり霧耶君だったんだね」

覚えているだろうか、天道時時雨という少年を？俺？俺はきちんと覚えてますとも……

「姉さん、時雨が依頼者なのか？」

「そうよ、あんたなら学校でこの子の縁の系を視たでしょう？」

「まあ、みたけどさ……」

今も見えているのだが、近くにあの小さい女の子も一緒にいるだろう。姿を見せていないところを見ると只者ではないはずだ。

とりあえず時雨を仕事場である応接間に連れて行き、お茶を焰華に出してもらつて俺は茶菓子を準備する。

「……霧耶さん、あの時雨って人只者じゃないですよ？幾重にも常任が持っていない縁を持っている気がします」

高級和菓子店の箱を取り出してやっぱり戻している優に俺は告げる。

「おいおい、きちんと出せよ？……やっぱり、あれはおかしい縁だよなあ……けど、仕事上詮索禁止だから時雨が何者かは調べないほうが身のためだろうな」

「そうですね」

エンキリ一族はプライベートなことなどに口を挟んだりしないのが当然だ……もっとも、どこの会社もそんなもんだろうが、ことエンキリ一族は勝手に相手のことを調べようとするならばマジで首が飛ぶか行方不明になっちまう。

「きつと、節佳さんはあの縁の糸を切れなかったんでしょね？」

「……どうだろうな、相当あれは骨が折れそうだ」

骨が折れるどころか、自信が折れちまいそうだと思ったのは内緒だ。

「で……時雨の依頼をきちんと聞いてなかったな」

「ああ、そうだったね……縁を切る一族、エンキリ……そのエンキリである君に依頼したのは妹のことなんだ」

「妹？お前のことじゃねえのか？」

「え？違うよ」

てつきりこのぶつとい縁の意図のことかと思っていたのだが、違ったようだ。けどまあ、実は時雨の妹さんも時雨以上にぶつとい糸があるかもしれないからな。そっちをきってもらいたいのかもしいないな。

時雨の表情は真剣そのもので、張り詰めた空気はただそこにあるだけで世界を止めてしまうのではないかという錯覚を俺に与えてくれた。

そして、時雨の口が重く開かれる。

「……実は最近ね……うちの妹にやたらと男が話しかけてくるんだ！」

「えええええい！！これまでのちよつとしたシリアスな空気を返せ！！！！」

「霧耶さん！！ちよつと何してるんですか！！」

「師匠！丸腰の相手に襲い掛かるのはどうかと思います！！」

俺は焰華と優に押さえられて動けなくなって、姉さんはずっと静かにお茶をすすっている。

「……………で、まとめると依頼内容は？」

「簡単さ、うちの妹の男の縁を妹に内緒でスライスしてほしい……ぎりぎりのところまでね」

「ふう〜んそうかい……………ところで、今日妹さんはきているのか？」

「来てないけど……………やっぱりつれてきたほうが良かったかな？」

つれてきたら内緒じゃなくてばれちまうだろうに……………とぐだぐだ言っている場合ではない。俺に出来ないことはない！報酬さえもらえば俺の力で何とかして見せるぜ

「……………というわけで姉さん、力を貸して？」

「さっきの文と逆のことを言ってるわよ……………と、いいたいところだが今回はアドバイスをあげるわ」

「アドバイス？」

あな珍し……………あの姉さんが俺にアドバイスをくれるなんてこれは天変地異の前触れではないか？

姉さんは立ち上がって歩き、とあるところで立ち止まった。

「……………焰華が優を使えばいいじゃない」

「……………それ、本気？」

「本気本気……………」

顔がにやついているところを見ると怪しいものだが……………これはしょうがないだろう。

「……………あの、師匠……………どういうことですか？」

「えつとだな、エンキリが縁を見ることができるのは知ってるだろ？それで、ある程度の実力者なら遠隔に相手の縁を切ることが出来るんだ。けどな、それをするにはその相手と知り合い……………つまり、縁を少なからず持つてないと切るのはちよつと難しいんだよ」

「しかし、拙者も知りませんよ？」

もつともなことを言う……だが、俺の話は終わっていたわけではない。

「ああ、それは知ってる。だからだな、縁切りつてのは縁を強く結ぶ相手がいれば力を増すことが出来るんだよ。エンキリが切ることの出来る縁の系の太さは実は決まってるな、それは自分が結んでい

る一番太い縁の系と同じ太さが限界なんだよ」

「……………」

理解して無いだろう……この顔は……まあ、簡単に言うなら「俺のことを信用していると思われる人物がいてくれれば俺はエンキリとしての力を高められるってことだ」

「ああ、なるほど……それなら、拙者に任せてください！」

すつくと立ち上がって胸を叩く。うーん、実に頼もしい味方なんだが……姉さんがにやけているのが非常に気になる。

「そんじゃ、はじめますかね……焰華、悪いが俺の左手を握っててくれないか？これから、ずっと、ずっと俺のことだけを考えていてくれ」

言っていてかなり恥ずかしい台詞なのだが、こうでもしないと俺は力を増すことが出来ない。

「承知しました！」

既に差し出していた俺の左手を焰華は掴み、目を瞑る。きつと、精神を集中しているのだろう。

「霧耶君、顔が赤いよ」

「うつせえ！……じゃ、始めるぞ」

俺も目を瞑り、時雨の縁の系をたどってゆく……こんなことをめつたにしないのだが今回はいたって簡単に時雨の妹と思われる人物の縁の系を発見できた。

「さて……と、まだ見ぬ時雨の妹さん、悪いがこれもお仕事なん

でね」

俺は右手を振りかぶってその縁を断ち切った……

エピソード

「ふう、終わった終わった……」

「見事なものだったわよ、霧耶」

「……… 疲れたけど……… 時雨、家に帰って妹さんをよく観察してるよ？じゃ、ちよつと眠るから………」

「師匠！？」

少年は膝をつき、隣にいる少女に支えられる。

「疲れただけよ……… さ、時雨君、言われたとおりに観察しておいてあげてね」

「わかりました……… じゃ、失礼します」

依頼主は姿を消し、残った人たちはため息をついて立ち上がる。

「……… 節佳さん、ちよつと私は外の空気を吸ってきます」

少年の親戚の少女も姿を消し、その空間に残ったのは三人となった。

「……… 焰華、私の弟子にならない？そっちのほうがさつさと強くなれるわよ？」

少年の姉は近くににいる少女にそう告げる。

「……… いえ、まだ拙者は師匠の下で励みます」

「振られちゃったか……… じゃ、頼りない師匠を助けてやってね」

少年の姉はそういつて去っていった。

眠っている少年に少女は話しかける。

「師匠、いずれ拙者は師匠の隣に立って見せますよ」

少女の静かな決意は眠っている少年の耳に届いただけだった。

〈Fin〉

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4691d/>

縁切　～エンキリ～

2010年10月8日15時55分発行